

NHKテレビニュースにおける障害関連用語の出現頻度

著者	徳田 克己
著者別名	Tokuda Katsumi
雑誌名	視覚障害心理・教育研究
巻	9
ページ	41-44
発行年	1992-12-25
その他のタイトル	Frequency of Words Concerned with Handicap on the NHK News
URL	http://hdl.handle.net/2241/00124837

NHKテレビニュースにおける障害関連用語の出現頻度

筑波大学 徳田 克己

I はじめに

一般の人の障害児・者に対する態度の形成に、マスメディアの報道内容やその姿勢が大きく関与していることはしばしば指摘されるところである。障害者に対する態度やイメージが提供される情報によって大きく規定されることを確認している研究は数多く、したがって当然、現代の主要な情報源である新聞やテレビの影響は極めて大きいと推測される。

徳田・遠藤（1991）は、障害に関連する用語の熟知性に対する新聞見出しの影響および障害児・者に対する態度形成やイメージ形成における新聞見出しの影響を解明するために、朝日新聞の記事の見出しに障害に関連する用語がどの程度出現しているか、またそれらの記事見出しが読者にどのようなイメージを形成させるかという点について検討し、興味ある結果を報告している。

本研究では映像のマスメディアの影響を検討するための基礎資料を得るために、NHKテレビニュースの中の障害関連用語の出現頻度を求め、用語別の比較を行いたいと考えた。なお、この種の研究は従来よりその必要性が指摘されていながら、作業コストの大きさから実施されなかったものであるが、汎用データベースを活用することによって、現在では極めて正確な検索が可能になっていることに留意しておきたい。

II 方法

検索には日本放送協会提供のデータベースであるNHKニュース（TV）原稿ファイルを用いた。対象とした報道内容は1986年10月1日から1991年9月30日までの5年間の全国向けニュースと関東甲信越地方向けの首都圏ローカルニュースであった。

対象とした全国ニュース番組はニュースワイド、モーニングワイド、全中ニュース、NC9、

ニュース21、ニュースTODAY、ミッドナイトジャーナル、最終ニュース、ナイトニュースなどであり、ローカルニュース番組はニュースワイドローカル、モーニングワイドローカル、イブニングネットワーク、NC630、NC640、NC645、NC845、NC850などであった。

検索対象用語は、心身障害学分野および特殊教育学分野において比較的使用頻度の高い用語から選択した。具体的には心身障害学あるいは特殊教育学関係の書物のタイトルおよび学術論文のキーワードに頻繁に現れるものを中心にして「視覚障害、聴覚障害、知能障害、肢体不自由、その他の障害」という従来から用いられている障害種別の分類に基づいて、特定の障害種別に検索対象の用語の数が偏らないように配慮した。またマスメディアでは差別用語として取り扱われている「めくら、つんぼ、びっこ、どもり」の4用語を加えた（共同通信社、1990）。

検索の対象とした用語は、障害者、障害児、ハンディキャップ、心身障害、特殊教育、統合教育、交流教育、福祉教育、視覚障害、盲人、弱視、盲導犬、盲学校、目の不自由な人、めくら、聴覚障害、聾者、難聴、手話、ろう学校、耳の不自由な人、つんぼ、言語障害、吃音、どもり、知能障害、精神遅滞、精神薄弱、知恵遅れ、発達障害、ダウン症、学習障害、肢体不自由、身体障害、運動障害、脳性マヒ、車いす、びっこ、病弱、虚弱、自閉症、情緒障害、行動障害、登校拒否、重複障害、重症心身障害、精神障害、養護学校、特殊学級およびからだの不自由な人の50語であった。徳田・遠藤（1991）の研究では、痴呆という用語が検索対象になっていたが、痴呆は検索時に同音異義語である「地方」が非常に多数出現し、分析コストが極めて大きくなるため、今回は検索対象から除外した。

Ⅲ 結果と考察

検索の結果を表1、表2に示した。出現頻度は全国ニュース(上段)とローカルニュース(下段)に分けて集計してある。また、ここに表示した数値はニュース記事の件数を示したものであり、放送回数ではないことに注意を要する。すなわち、同じニュース内容を複数回にわたって放送することがあるが、そういったケースでも表では1件と計数してある。なお、複数の用語が同一のニュースに出現するケースがあり、各用語の出現頻度の合計がニュースの合計数に等しいわけではないこ

とも留意しておかなくてはならない。

期間を以下に示したように、各年の10月から翌年の9月までに区分したが、これはニュース番組の改編時期に合わせたためである。具体的には、1986.10～1987.9、1987.10～1988.9、1989.10～1990.9、1990.10～1991.9の5期に分けた。

交流教育、めくら、つんば、吃音、どもり、知能障害、精神遅滞、身体障害、びっこ、虚弱、行動障害、重複障害、重症心身障害の13の用語では、全国ニュース、ローカルニュースともに出現の件数が0であったことから、表には示していない。

表1 TVニュースにおける障害関係用語の出現頻度：包括的用語・視覚障害・聴覚障害

		1986.10	1987.10	1988.10	1989.10	1990.10	小計	総計
		～1987.9	～1988.9	～1989.9	～1990.9	～1991.9		
障害者	全国ニュース	8	16	7	19	12	62	186
	ローカルニュース	25	15	15	37	32	124	
障害児		0	4	0	1	2	7	22
		4	6	2	0	3	15	
ハンディキャップ		0	2	2	0	0	4	7
		0	0	1	1	1	3	
心身障害		0	0	0	0	1	1	2
		0	0	1	0	0	1	
特殊教育		0	0	0	1	0	1	1
		0	0	0	0	0	0	
統合教育		0	0	0	0	0	0	2
		0	2	0	0	0	2	
福祉教育		0	0	0	0	0	0	2
		0	0	1	0	1	2	
視覚障害		0	0	0	1	0	1	1
		0	0	0	0	0	0	
盲人		0	2	0	0	0	2	15
		1	5	2	4	1	13	
弱視		1	0	0	1	0	2	6
		2	1	1	0	0	4	
盲導犬		2	4	1	2	0	9	16
		1	2	0	2	2	7	
盲学校		3	3	1	2	1	10	21
		2	0	3	3	3	11	
目の不自由な人		0	0	0	3	0	3	11
		0	5	1	2	0	8	
聴覚障害		0	0	0	1	2	3	3
		0	0	0	0	0	0	
聾者		0	0	0	0	0	0	1
		0	0	0	0	1	1	
難聴		1	1	2	0	2	6	11
		3	1	0	0	1	5	
手話		2	0	1	2	3	8	23
		1	4	1	5	4	15	
ろう学校		0	0	0	0	2	2	9
		1	1	1	1	3	7	
耳の不自由な人		0	0	0	0	0	0	3
		0	1	2	0	0	3	

表2 TVニュースにおける障害関係用語の出現頻度：言語障害・知能障害・肢体不自由

	1986.10 ～1987.9	1987.10 ～1988.9	1988.10 ～1989.9	1989.10 ～1990.9	1990.10 ～1991.9	小計	総計
言語障害	2 0	0 0	1 0	0 0	0 0	3 0	3
精神薄弱	0 0	0 0	0 3	0 0	0 0	0 3	3
知恵遅れ	0 2	1 5	2 4	2 4	1 4	6 19	25
発達障害	1 0	0 0	0 0	0 0	0 0	1 0	1
ダウン症	1 1	0 0	0 0	0 0	0 0	1 1	2
学習障害	0 0	0 0	0 0	1 0	0 0	1 0	1
肢体不自由	0 0	0 0	0 0	1 0	0 0	1 0	1
運動障害	0 0	0 0	0 0	0 1	0 0	0 1	1
脳性マヒ	0 3	0 2	0 2	0 1	0 1	0 9	9
車いす	8 17	13 14	11 8	16 20	8 23	56 82	138
病弱	0 1	1 1	0 0	0 2	1 1	2 5	7
自閉症	1 0	0 1	1 0	0 1	0 1	2 3	5
情緒障害	0 1	1 0	1 0	0 0	0 0	2 1	3
登校拒否	7 2	5 0	7 4	5 6	8 0	32 12	44
精神障害	2 0	1 2	1 1	2 0	0 0	6 3	9
養護学校	3 6	0 7	1 6	0 9	3 9	7 37	44
特殊学級	0 2	0 0	0 1	0 0	0 0	0 3	3
からだの不自由な人	1 0	2 0	0 0	1 0	0 0	4 0	4

以下に結果をまとめる。

- ①全体的にみると、朝日新聞の見出しに出現する回数よりもNHKテレビニュースに出現する件数の方が少なかった。例えば、新聞見出し（朝日新聞全国版）には週に1回程度の割合で「障害児」あるいは「障害者」という用語が含まれていた（徳田・遠藤，1991）が、テレビニュースではローカルニュースを含めた件数でみても約9日に1回の割合であった。ただし、放送がかなりの回数にのぼるニュースがある点やニュースにおける映像の情報量は新聞の活字情報の量に比べてはるかに多いといった点からみ

ると、視聴者の障害児・者に対するイメージに与えるテレビニュースの影響が極めて大きいことは異論のないところであろう。

- ②全国ニュースよりもローカルニュースに障害関連用語が多く出現している傾向がある。全国ニュースでは「全国身体障害者スポーツ大会が開催される」「精神保健会議で精神障害者の自立の歌を合唱」「障害者の日に政府主催の集会で官房長官が政治の積極的取り組みを強調」「障害者保護法案が米下院で可決 差別全廃の画期的法案」などのような大会や記念行事、内外の障害者政策や訴訟、事故、事件に関する内容が

- 多く、ローカルニュースでは「川崎にエレベーターつき歩道橋を建設へ」「盲人の料理教室」「福祉大相撲で障害者・老人2,000人が楽しむ」などの地域での障害者に関連する活動の紹介が中心であった。
- ③ハンディキャップという用語は障害者だけでなく、高齢者や中国帰国子女に関する内容にも使用されている（障害に関連しないケースは表には含まれていない）。「片腕剣士高校総体に」「米大リーグに片腕投手」などでは『ハンディキャップに負けず…』という表現がなされている。
- ④心身障害、特殊教育、統合教育、交流教育、福祉教育などの用語はほとんどニュースでは使用されていない。徳田・遠藤（1991）の新聞見出しにおける出現頻度をみても同様な傾向があった。マスメディアでは未だ認知されていない用語であると言えよう。
- ⑤特定の障害を示す『…障害』という用語の使用頻度は低い。障害者を表現する用語よりも、盲導犬、手話、車いすなどの障害者の用いる手段に関係する用語が障害者を象徴する役割を持ち、より多く使用される傾向がある。「車いすで楽しめるスケート場」「盲導犬での買い物OK スーパー忠実屋が実施へ」などがその例である。
- ⑥障害児を表現する場合には、『視覚障害児、弱視児』、『聴覚障害児、難聴児』、『精神薄弱児、肢体不自由児』ではなく、『盲学校の生徒たち（子どもたち）』、『ろう学校の…』、『知恵遅れの…、養護学校の…』という表現がなされることが多い。
- ⑦めくら、つんば、どもり、びっこなどのいわゆる差別用語は全く出現していない。これは新聞

見出しや新聞記事においても同様であった。

- ⑧難聴という用語では基地や空港の騒音訴訟関係の内容が5件あり、半数を占めている。他にも爆発事故や金属バットの使用で難聴になるといった内容があり、難聴児・者の啓蒙的話題は1件もなかった。
- ⑨知恵遅れという用語はローカルニュースに多く出現している。「知恵遅れの人たちのスポーツ大会」「障害児とボランティアでケーキ作り」などのように活動の紹介が主な内容であるが、「小学生少女殺し 知恵遅れの被告に懲役12年」「知恵遅れの小学生 崖壁から転落」「未成年・知恵遅れ殺人犯の死刑 憲法に反せず 米連邦最高裁が判断」などのように事件・事故にかかわるものも目立っている。
- ⑩登校拒否はローカルニュースよりも全国ニュースでの出現頻度が高い。登校拒否の頻度の高さは、いじめの問題が全国ニュースで取り上げられる頻度が高いことや事件・事故に関連して話題になることが多いことが理由である。
- ⑪精神障害では「新宿駅ホーム殺人事件 犯人は精神障害者と判明」「精神障害男を強盗殺人で起訴」「幼稚園帰りの男の子が母親の目の前で刺殺される 犯人は精神病患者」などの事件に関するネガティブなイメージの内容が目立っている。それゆえ、全国ニュースでの頻度が高い。

参考文献

- 1) 共同通信社（1990） 記者ハンドブック 一 用字用語の正しい知識一、共同通信社
- 2) 徳田克己・遠藤なおこ（1991） 新聞の見出しにおける障害に関連する用語の出現頻度の分析 一朝日新聞を例として一、計量国語学, 18 (1), 26-34.